**「の生涯」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

**トップページ**

[**http://sankyokanjin2.jp/**](http://sankyokanjin2.jp/)

は、日本文学に対して最大の影響を与えた詩人です。それは、「」が白居易自身の手で編纂されて遣唐使により日本にもたらされたのに対し、杜甫や李白の詩集が編纂されたのは後代であり、日本にもたらされるのが遅かったこともありますが、それにも増して「」を始めとする白居易の華麗な詩風が平安貴族の好みに合っていたことによるものでしょう。

　このたび「白居易の生涯」と題しまして、その生涯と日本文学への影響を紹介したいと思います。

　白居易は、のの余波がまだ残っている７７２年にで生まれました。李白の没後約十年、杜甫の没後約二年後のことでした。早熟の秀才で５～６歳の時、既に詩を作ることができ、１５歳頃、の為の勉強を始め、１６歳の時友人の送別会において｢の草をし得て送別す｣と言う詩を作りました。

　白居易は、この年に長安に赴き、時の大詩人であるを尋ねました。顧況は「」という字を見て、「長安の米は高くてみ易くはないぞ。｣と言いましたが、**｢古原の草を臥し得て送別す｣**の最初の四句を見て驚嘆し、「これほどの語を用いることができれば、み易いであろう。前言は冗談だ。」と言ったとされています。この詩は、白居易の出世作とされ、今でも白居易の墓の前の石碑に刻まれております。

　｢古原の草を臥し得て送別す｣を紹介いたします。

**離離原上草　　　たり の草**

**一歳一枯榮　　　に たびす**

**野火燒不盡　　　 焼けども尽きず**

**春風吹又生　　　 吹きて又生ず**

**遠芳侵古道　　　 をかし**

**晴翠接荒城　　　 に接す**

**又送王孫去　　　又 の去るを送れば**

**萋萋滿別情**　　**として 滿つ**

白居易は、既にこの前年、江南地方にいたときに「にてを送りりてんでのに書を寄す」と言う詩を作りました。詩題のごとく、故郷の地に行く人を送り､手紙を届けてもらうことを頼んだときのものです。この詩に、**「早熟の詩人」**とされる白居易の片鱗が表れています。

**故園望斷欲何如　　　 してせんと欲す**

**楚水吳山萬里餘　　　 の**

**今日因君訪兄弟　　　 君にってをう**

**數行鄉淚一封書　　　の　の書**

は漢の後宮にあった絶世の美女でしたが、時の皇帝は高級の女達の絵を描かせ、それを見てお召しになる者を決めていました。そのため、後宮の女は絵師に賄賂を送って自分の姿を美しく書かせましたが、王昭君は賄賂を送らなかったので、絵師はその姿を醜く書きました。当時は友好国であった匈奴の王であるが漢を訪れ、後宮の女の一人を自分の妻として迎えたいと申し出ました。

時の皇帝は、醜い女を与えようとして王昭君を指名しました。単于に引き合わせるときに、皇帝は王昭君が絶世の美女であることに気付きましたが、既に遅く、王昭君は単于の妻としての地に送られそこで生涯を終えました。

この話は広く伝えられ、李白を始め多くの詩人が、王昭君を詠った詩を作っております。居易は、１７歳の時、悲劇の美女とされる王昭君を詠った二首の詩を作りました。そのうちの一首を紹介いたします。この詩は、王昭君が匈奴の地を訪れた漢の使いに対して、「いつが黄金で自分の身を買い戻して欲しい。自分の美貌がかってより衰えたなどと伝えないで欲しい。」と言ったと想像して作られています。

**漢使卻回憑寄語　　　 するとき りて語を寄す**

**黄金何日贖蛾眉　　　黄金 れの日か をうと**

**君王若問妾顏色　　　 しがを問わば**

**莫道不如宮裏時　　　うかれ の時にかずと**

　**白**居易は、２８歳のとき、科挙の受験のため長安に赴き、翌年最初の試験で、たった１７人しか合格できなかった試験に、最年少で合格することができました。白居易の家は下層階級に当たり、もし、合格にも家柄が考慮された盛唐の時代に生まれたら、科挙には合格できなかったと言われています。

三年後に高級官僚の試験にも合格し、エリートコースとしての道を歩き始めましたが、合格者の中に、生涯の親友となったがいました。

　この年に、白居易の最大名作と言われる**「」**を作り、「長恨歌の」ともてはやされました。「長恨歌」は、七言百二十句に及ぶ華麗な詩ですが、その最後の部分を紹介いたします。殺されて仙女となった楊貴妃が、玄宗の使いの道士に対し、玄宗に伝えるように言った言葉が綴られています。「の」「の」という言葉は、この部分から生まれました。

**臨別殷勤重寄詞　　　別れにんでに重ねてを寄す**

**詞中有誓兩心知　　　に誓い有り のみ知る**

**七月七日長生殿**

**夜半無人私語時　　　 人無く の時**

**在天願作比翼鳥　　　天に在りては 願わくはの鳥と作り**

**在地願爲連理枝　　　地に在りては 願はくはの枝と為ならん**

**天長地久有時盡　　　天長　地久　時有りて尽つくるとも**

**此恨綿綿無絶期　　　此の恨みはとして絶ゆる無からん**

「長恨歌」は、源氏物語を始めとする平安文学に多大の影響をもたらしましたが、その中の句「だ短く 日高くして起く」を句題としてが作った和歌、「三千の に在り」を句題として源道済が作った和歌、「 花開く日」を句代としてが作った和歌、「 葉落つる時」を句代としてが作った和歌を紹介いたします。

**朝日さす玉のうてなも暮れにけり　人と寝る夜のあかぬなごりに（藤原高遠）**

**ももしきの君が朝寝（あさい）の移り香はしみにけらしな妹が狭衣（源道済）**

**春風にゑみをひらくる花の色は昔の人の面影ぞする（藤原高遠）**

**木の葉散る時につけてぞなかなかに我が身のあきはまづ知られける（藤原高遠）**

しかし、白居易は、その後は「」「」に集約される社会批判の詩を作り、その中でも「」「のを折る」などが有名です。白居易はこのころから、自分の作った詩を老婆に読んで聞かせ、分かるまで易しくするよう推敲したとされ、白居易の詩は「」とされて親しみやすい物となっています。

　この頃作られた名作に、**「王十八の山に帰るを送り、にす」**があります。この詩のは特に有名で、平家物語の「紅葉」に引用されております。この詩を紹介いたします。

**曾於太白峰前住　　　てに於いて住み**

**數到仙遊寺裏來　　　しばに到りてる**

**黑水澄時潭底出　　　澄む時 で**

**白雲破處洞門開　　　破るる処 開く**

**林間暖酒燒紅葉　　　に酒を暖めて紅葉をき**

**石上題詩掃綠苔　　　に詩をしてをう**

**惆悵舊遊無複到　　　す た到ること無きを**

**菊花時節羨君回　　　の 君がるをむ**

この詩の頸聯は、また、多くの和歌に引用されております。このうち、の詠んだ和歌、が詠んだ和歌を紹介いたします。

**林あれて秋のなさけも人とはず紅葉をたきしあとの白雪（藤原定家）**

**このもとにつもる落葉をかきつめて露あたたむる秋のさかづき（藤原良経）**

　この頃から、白居易は寺院を訪ねることが多かったらしく**「雲居寺に遊び三十六に贈る」**という詩を作っています。山深いところを散歩する喜びは、「山は山を愛する人の物だ」という語に表れています。

**亂峰深處雲居路　　　 深き処 の**

**共蹋花行獨惜春　　　共に花を踏みて行きり春を惜しむ**

**勝地本來無定主　　　は本来 無し**

**大都山屬愛山人　　　 山は属す山を愛する人に**

白居易の親友であったは、真面目な人間であり不正をあばくことが多かったため、逆に恨みを買い、の地に左遷されました。このとき、白居易はに務めていましたが、元槇のことを思いやり、宿直の夜**「八月十五日夜　にりし 月に対してをう」**という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**銀台金闕夕沈沈**

**独宿相思在翰林　　　独宿 うて に在り**

**三五夜中新月色　　　　新月の色**

**二千里外故人心　　　　の心**

**渚宮東面煙波冷　　　の東面にはかに**

**浴殿西頭鐘漏深　　　のには 深し**

**猶恐清光不同見　　　る 　同じくは見ざらんことを**

**江陵卑湿足秋陰**　**はにして る**

この詩の頷聯「 の色　 の心」の対句は有名で、和漢朗詠集に採録されており、源氏物語に引用されているほか、多数の和歌に影響を与えています。

これらのうち、が詠んだ和歌と、が読んだ和歌を紹介いたします。

**月きよみ千里の外に雲つきて都のかたに衣うつなり（藤原俊成）**

**ふす床をてらす月にやたぐへけむ　千里のほかをはかる心は（藤原定家）**

白居易は、４０歳の時に母を失い、この頃から仏教へのが急激に高まっていきました。このとき作られた**「」**を紹介いたします。一面に散った花びらのうえに満ち渡る蝉の声がのように聞こえていたのでしょう。これにより、秋の悲しさが一層引き立っています。

**黄昏独立仏堂前　　　 り立つ仏堂の前**

**満地槐花満樹蝉　　　地に満つる に満つる蝉**

**大抵四時心総苦　　　 心べて苦し**

**就中腸断是秋天　　　 するは れ**

　「墓立」の転句と結句は、和漢朗詠集に採録され、源氏物語に引用されているほか、多数の和歌に引用されております。の詠んだ和歌、が詠んだ和歌を紹介いたします。

**おしなべて思ひしことのかずかずに猶色まさる秋の夕ぐれ（藤原良経）**

**さくら花山ほととぎす雪はあれど思ひをかぎる秋は来にけり（藤原定家）**

　このころ、白居易は、都を離れて過ごす村の夜景を**「」**という詩に詠いました。ひっそりとした中に美しさを感じさせる詩です。この詩を紹介いたします。

**霜草蒼蒼蟲切切　　　 として 虫**

**村南村北行人絶　　　 ゆ**

**獨出前門望野田　　　り門前に出でて を望めば**

**月明蕎麥花如雪　　　月 明らかにして 花 雪の如し**

このころの白居易の作品に**「」**があります。妻と別れて暮らす秋の昨夜と独り寝の寂しさを歌った物です。「秋夕」を紹介いたします。

**葉聲落如雨　　　葉の声は 落つること雨の如く**

**月色白似霜　　　月の色は 白きこと霜に似たり**

**夜深方獨臥　　　夜深ふけて にりす**

**誰爲拂塵牀　　　が為に 塵のをわん**

　この詩を、平安貴族達は、「」と受け止め、様々な和歌を作りました。の詠んだ和歌を、の詠んだ和歌を紹介いたします

**夜もすがら月に霜おく槙の屋にふるか木の葉も袖ぬらすらむ（慈円）**

**こゑばかり木の葉の雨は古郷の庭もまがきも月の初霜（藤原定家）**

喪が明けて都に戻った白居易は、皇太子のお守り役となりましたが、暗殺事件の犯人を捕まえるのを早く行うように進言したため、その一味から憎まれ、「」「」で政治を批判したことも問題とされ、のとして左遷されました。白居易が受けた初めての挫折であり、その後の人生観に大きな影響を与えました。

慌ただしい旅立ちと、京を離れる苦痛から遅々として進まぬ足取りを「**初めて官をされを過ぐ」**と言う詩に詠っております。望秦嶺は、長安の南方にあるにある山で、長安を一望できる最後の山です。この詩を紹介いたします。

**草草辭家憂後事　　　として家を辞してをい**

**遲遲去國問前途　　　として国を去りて前途を問う**

**望秦嶺上迴頭立　　　 頭をらせて立てば**

**無限秋風吹白鬚　　　無限のを吹く**

白居易が江州に向かう途中で作られた**「」**を紹介いたします。白居易の挫折感が表れています。

**人生四十未全衰　　　人生四十 未だくは衰えず**

**我為愁多白髪垂　　　我は愁い多きが為に 白髪る**

**何故水辺双白鷺　　　に の**

**無愁頭上亦垂糸　　　愁い無きも 頭上にた糸をる**

に付いた白居易は新たにを建てて、そこで過ごしました。、左遷されてきた司馬には実際の仕事は与えられませんでした。江州の地は、てが隠棲した地に近く、白居易は、そこで、清少納言の故事で有名な詩**「 新たにをし草堂　初めてたまにす」**を作り、これは自分にふさわしい地で、この地で一生を終えても良いという意を示しました。

　しかし、この詩に表された白居易の心が強がりであったことは、後に作られた詩から明らかになっています。

**日高睡足猶慵起　　　日 高く　り足りて お 起くるにし**

**小閣重衾不怕寒　　　にを重ねて 寒をれず**

**遺愛寺鐘欹枕聽　　　の鐘は 枕を てて聽き**

**香爐峯雪撥簾看　　　の雪は を ねて看る**

**匡廬便是逃名地　　　は ちれ 名を逃るるの地**

**司馬仍爲送老官　　　はお 老いを送るの官り**

**心泰身寧是歸處　　　心 く 身 きは れ する**

**故鄕何獨在長安　　　故鄕 何ぞり 長安にのみ 在らんや**

**白**居易がが左遷されたとき、それを思いやる詩を作ったように、白居易の左遷を聞いた元槇は、重病の身でしたが、白居易の左遷を聞いて、それを思いやる詩を作りました。

この詩**「のを授けられしを聞く」**という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**残灯無焔影憧憧　　　 無く 影**

**此夕聞君謫九江　　　の 君がにせらるるを聞く**

**垂死病中驚坐起　　　の病中 驚いてすれば**

**暗風吹雨入寒窓　　　雨吹いて にる**

このころ、白居易は、雪の降りしきる夜の様子を**「」**という詩に表しました。静かな夜を詠った、味わい深い風景詩です。

**已訝衾枕冷　　　已にる の冷ややかなるを**

**復見窗戸明　　　た見る の明らかなるを**

**夜深知雪重　　　夜 深くして 雪の重きを知る**

**時聞折竹聲　　　時に聞く の声**

白居易は、この地で「長恨歌」と並び称される華麗な長編の詩である**「琵琶行」**を作りました。七言八十八句からなるこの詩は、元妓女で今は商人の妻となっている女性の琵琶の音に感動したことや、その女性から聞いた身の上話を綴ったものです。その最後の部分を

紹**介致します。**

**今夜聞君琵琶語　　　今夜 君の琵琶の語を聞くに**

**如聽仙樂耳暫明　　　を聽くが如く 耳 くたり**

**莫辭更坐彈一曲　　　辞するれ更に坐して一曲を彈くを**

**爲君翻作琵琶行　　　君が爲にして「」を 作らん**

**感我此言良久立　　　我が此の言に感じて や久しく立ち**

**卻坐促絃絃轉急　　　き座してをば 絃 急なり**

**淒淒不似向前聲　　　として似ず の声に**

**滿座重聞皆掩泣　　　滿座 重ねて聞くに 皆をう**

**座中泣下誰最多　　　座中 下ること か 最も多き**

**江州司馬青衫**濕　　　**の う**

　江州の地で過ごすこと三年、白居易のもとに長安からの辞令が届きました。「長安に戻れる」と胸をときめかせて空けてみると、「忠州の刺吏に任ずる」というものでした。刺史は長官であり、階級は上がり、実務にも就けることになりましたが、忠州は更に奥地でした。

　忠州に付いた白居易は、「江州にいたときは友達もなく家を出ることも殆どなかったが、忠州では人間らしい者に会えれば嬉しいくらいだ」と言う意味の詩を作っています。

　忠州において、白居易は、名作**「春江」**を作りました。は『』にも採られているほか、源氏物語にも引用されています。

また、については、がの詩才を試した話が、の『』に載せられています。当時「」は秘物とされ、嵯峨天皇だけが見ることができました。嵯峨天皇は、この詩の「空しく」を「遙かに」に変えて、自分の作であると言って小野篁に見せました。これを見た小野篁は、「良くできた詩でございます。しかしながら、「遙かに」を「空しく」に変えると、更に良くなると思われます。」と申し上げたところ、嵯峨天皇は驚いて、真相を打ち明け、「汝の詩才は白楽天に匹敵する。」と言ったと書かれています。「春江」を紹介いたします。

**炎涼昏曉苦推遷　　　 だし**

**不覺忠州已二年　　　覚えず 已に二年**

**閉閣只聽朝暮鼓　　　を閉ざしてだく の**

**上樓空望往來船　　　に上りてしく望む の船**

**鶯聲誘引來花下　　　にせられて に来たり**

**草色句留坐水邊　　　にせられて に坐す**

**唯有春江看未厭　　　だの看れども 未だかざる有り**

**縈砂繞石淥潺湲　　　砂をり石をりて たり**

「春江」の影響を受けた多数の和歌のうち、が詠んだもの、が読んだものを紹介いたします。

**鶯の鳴きつる声にさそはれて花のもとにぞ我は来にける（大江千里）**

**鶯の初音をまつにさそはれてはるけき野辺にも経ぬべし（藤原定家）**

白居易は、在任中に荒れ地を耕して、その地をと名付け、その地に自分の手で木を植えてその成長を楽しみました。後にが流罪中に同じ事を行い、自分の号を「東坡」としたのも、このことに由来します。

　忠州在任二年にして、白居易は長安に呼び戻されることになりました。出発に際し、東坡に植えた木と別れる詩**「のに別れる詩　」**という二首の絶句を作りました。其の二を紹介いたします。この詩は、自分がいなくなっても、今までと同じように春の美しさを見せてくれ、新しく来る刺史は、花を愛する人でないとは限らないからと詠っています。

**花林好住莫顦顇　　 して することかれ**

**春至但知依舊春　　春至ればだ知れ 旧にって春なるを**

**楼上明年新太守**

**不妨還是愛花人　　げずたれ 花を愛する人なるを**

**こ**のようにして長安に戻った白居易でしたが、中央では派閥抗争が続いており、此が嫌になった白居易は、自ら地方に赴くことを願い出て、との刺史を歴任することになりました．風光明媚なこれらの地で、業務に励む傍ら、これらの自然を楽しみ、多くの詩を作りました。「春にす」もそのひとつです。において作られたもので、西湖の美しい風景を述べ、杭州を離れられないのは、西湖であると結んでいます。**「春湖上に題す」**を紹介いたします。

**湖上春來似畫圖　　　に春来りて に似たり**

**亂峯圍繞水平舖　　　 して 水平らかにく**

**松排山面千重翠　　　松は山面にして の**

**月點波心一顆珠　　　月は波心に点じて の**

**碧毯線頭抽早稻　　　の をき**

**青羅裙帶展新蒲　　　の をぶ**

**未能抛得杭州去　　　未だをち得て 去るはず**

**一半勾留是此湖**　　　**の れ此の**

この年、白居易は、の泥をって堤を作り「」と名付けて、桃と柳を植えて、西湖の風景をより美しいものとしました。後に、白居易は白堤のことを追懐し、**「を想う」**という詩を作っております。自ら植えた柳の下で、誰が今その枝を折っているのだろうかと詠っています。この詩を紹介いたします。

**曾栽楊柳江南岸　　　て栽えし の岸**

**一別江南兩度春　　　一たび江南に別れてより 兩び春をる**

**遙憶青青江岸上　　　遙かに憶う青々たるの**

**不知攀折是何人**　　**知らず するは れなるかを**

においても、白居易は風光の明媚さを詠った**「」**という詩を作りました。このころ、「花鳥風月」を美しく詠いあげる白居易の本領を発揮した詩が多く作られております。「正月三日間行」を紹介いたします。

**黃鸝巷口鶯欲語　　　 初めて語り**

**烏鵲河頭冰欲銷　　　 えんと欲す**

**綠浪東西南北水　　　 東西 南北の水**

**紅欄三百九十橋**

**鴛鴦蕩漾雙雙翅　　　 す の**

**楊柳交加萬萬條　　　 すの**

**藉問春風來早晚　　　す の来たること**

**只從前日到今朝**　　　**だ よりに到る**

滞在中、白居易は詩友のとで出会いました。二人は、揚州の近くののに上り、共に詩を作りました。二人は共に５５才、九層の楼を登るのは大変だったようです。白居易が作った「とにに登る」と、劉禹錫が作った「とに棲霊塔に登る」を紹介いたします。なお「」は劉禹錫の、「」は言うまでも無く白居易の字です。

**半月悠悠在広陵　　　 としてに在り**

**何楼何塔不同登　　　れの楼　 れの塔 に登らざらん**

**共憐筋力猶堪任　　　共に憐れむ のおにえ**

**上到棲霊第九層**　**上りて第九層に到れることを**

**歩歩相攜不覺難　　　 えれば きを覚えず**

**九層雲外倚闌干　　　九層の による**

**忽然笑語半天上　　　としてす の上**

**無限遊人舉眼看　　　無限の を挙げて看る**

　を辞任し中央に戻った白居易は、法務次官を持って実質上の役所勤めを止め、皇太子付きの名誉職となって、王維に倣っての生活を送り、多くの時間をのの近で過ごし、自ら「」と称しました。気楽な生活の中で作られたのが**「酒に対す」**五首で、其の二が特に有名です。また、其の四からは、王維の「のに使いするを送る」が、既に「」と呼ばれで詠われていたことが分かります。

人生は、火打ち石から出る火花のように短い時間しかない。そこでは、大いに酒を飲んで楽しもうと詠った「其の二」を紹介いたします。

**蝸牛角上争何事　　　 何事をか争う**

**石火光中寄此身　　　 この身を寄す**

**随富随貧且歓楽　　　富に随いに随い くせん**

**不開口笑是痴人**　**口を開いて笑わざるは れ**

　「酒に対す其の二」は、和歌にも影響を与えております。このうち、が詠んだ和歌、が詠んだ和歌を紹介いたします。

**石をうつ光の中によそふなりこの身の程をなに歎くらん（藤原俊成）**

**はかなしや見る程もなき石の火の光のうちによする此の身は（花山院師兼）**

　このころの白居易の、気楽で満足した生活を詠った詩四首を紹介いたします。最初に**「に暑を避く」**を紹介いたします。清々しい香山寺の夏の様子が綺麗に描写されています。

**六月灘声如猛雨　　　六月 猛雨の如し**

**香山楼北暢師房　　　の の**

**夜深起凭闌干立　　　夜深くして 起ちてにりて立てば**

**満耳潺湲満面涼**　　**耳に満つる に満つる**

次に、**「」**を紹介いたします。長安の様子と香山寺近くの田園の様子を比較して描写しており、白居易の達観した考えが伺われます。

**春風先發苑中梅　　　 づ く の梅**

**櫻杏桃梨次第開　　　 次第に 開く**

**薺花黄莢深村裏　　　 の**

**亦道春風爲我來　　　たう 我が爲に來ると**

白居易はの対岸にあるを訪れました。竜門の石窟で現在の観光名所の一つです。そこで**「の」**という詩を作りました．無駄な役人生活に労力を使うことなく､山水や詩作を楽しもうという隠逸の心が現れております。この詩を紹介いたします。

**龍門澗下濯塵纓　　　 をい**

**擬作閒人過此生　　　とっての生を過ごさんとす**

**筋力不將諸處用　　　筋力はってに用いず**

**登山臨水詠詩行　　　山に登り水に臨み 詩を詠じて行かん**

　続きまして、閑適な生活を詠った**「の」**を紹介いたします。訪れる客も稀であり、静かな生活を送っていたことが窺えます。

**地僻門深少送迎　　　地はより門は深くして 送迎なり**

**披衣閑坐養幽情　　　をきてし をう**

**秋庭不掃攜藤杖　　　 わず にわりて**

**閑蹋梧桐黄葉行**　　　**にのをんでく**

長寿を重ねるにつれ、元槇を始めとする友人達とは次々にを異にすることになりましたが、はまだ健在でした。このころの高官は、を側に置き、身の周りの世話をさせたり、その芸能を楽しんだりしておりましたが、白居易は、二人の妓女を解放しました。このとき、妓女を柳の枝に例え、これまでの苦労をねぎらうと共に、変な男にかないようにとの願いを**「に別る」**という詩に作りました。この詩を紹介いたします。

**両枝楊柳小楼中　　　の の**

**嫋娜多年伴酔翁　　　として 多年 に伴う**

**明日放帰帰去後　　　 ち帰すも帰り去りて後**

**世間応不要春風**　　**世間ににをめざるべし**

　これを見た劉禹錫は、白居易の未練がましさをからかって、これに和した詩**「楊柳詩詞」**という詩を作って送りました。有名な「の」で始まる「楊柳詩詞」とは別の作です。「解き放った妓女は、どこにいくやら分かったものではない。」と言う意味で、二人の軽妙なやりとりが表されております。

輕盈嫋娜占年華　　　 **として を占む**

舞榭妝樓處處遮　　　**に舞い にい にる**

春盡絮飛留不得　　　**春尽き 飛んで 留め得ず**

隨風好去落誰家　　　**風にって好んで去り 誰が家にか落つ**

　詩名高い白居易が尊敬した詩人は誰だったのでしょうか。杜甫でも李白でもありません。それは**「潯陽楼に題す」**に示されるように、自然派と言われる陶潜と韋応物でした。この詩を紹介いたします。数多くの大詩人に尊敬された陶潜の偉大さは「知る人ぞ知る」の感があります。

**常愛陶彭澤　　　常に愛す**

**文思何高玄　　　 何ぞ高玄なる**

**又怪韋江州　　　又た怪しむ**

**詩情亦清閑　　　詩情　亦た清閑なるを**

**今朝登此樓　　　今朝 此の楼に登り**

**有以知其然　　　以て其のるを 知ること有り**

**大江寒見底　　　大江 寒く底を見れば、**

**匡山青倚天　　　 青く天にる**

**深夜湓浦月　　　深夜 の月、**

**平旦鑪峰煙　　　平旦 の煙**

**清輝與靈氣　　　清輝と霊気と**

**日夕供文篇　　　日夕に 文篇を供す**

**我無二人才　　　我に二人の才無し**

**孰爲來其間　　　か 其の間に来ると為さん**

**因高偶成句　　　高きにりて 句を成すも**

**俯仰媿江山　　　して　江山に愧づ**

白居易は、７１歳の時、法務長官の肩書きをもって致仕しました。かつて、杜甫の祖父が７４歳になっても致仕しないことを批判して「７０歳で致仕するのは礼法である」と詠ったことに遅れること一年、いささか晩節を汚した感がしないでもありません。

　７４歳の時、白居易は知り合いの老人達を集め、自分達の長寿を祝う会を開き「尚歯会」と名付けました。このとき、集まった老人は９名でしたが、白居易は７０歳に満たない二人を若造として、会には加えませんでした。「尚歯会」は３月２１日に行われました。現在行われている「尚歯会」は、これに由来し、７０歳以上をメンバーとし、３月に行うのが通例となっています。

　白居易は、８４６年、７５歳の時、自らの生活が幸せであったことを祝う「自ら老身を詠じ 諸々の家族に示す」という詩を作りました。「は七十五に及び　は五十千にう」で始まるこの詩が、白居易の遺作となりました。

この年の１１月、白居易は天寿を全うしました。時の皇帝である宣宗は、宰相の官と従二品の位を追贈し、「白居易をす」という詩を送りました。官位は、詩人としてはに次ぐものです。

宣帝が追贈した詩の紹介を最後に、『物語で楽しむ漢詩・和歌』「白居易の生涯」を終わります。やはり、白居易の代表作品は「長恨歌」と「琵琶行」であったと言えるでしょう。

**綴玉聯珠六十年　　　 六十年**

**誰教冥路作詩仙　　　かをして とす**

**浮雲不繫名居易　　　げず 名は**

**造化無爲字樂天　　　 は**

**童子解吟長恨曲　　　童子もく吟ずの曲**

**胡兒能唱琵琶篇　　　もくう琵琶の**

**文章已滿行人耳　　　已に満つ の耳**

**一度思卿一愴然**　　　**一度を思えばに**

（令和元年９月２３日作成）

参考文献等

　『白楽天１００選』石川忠久著、ＮＨＫライブラリー出版

　『中国漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版

　ブログ「千人万首　資料編　和歌に影響を与えた漢詩文」

　<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/kansi.html#kansi>